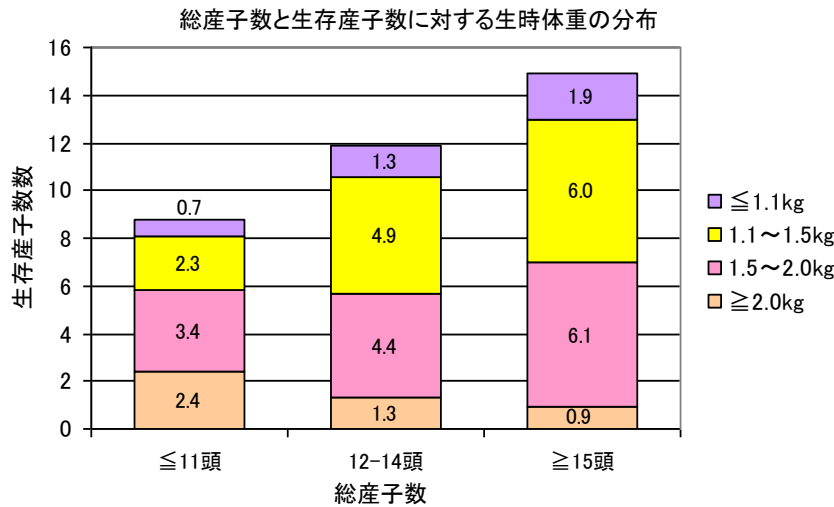


# 子豚が増えた時の生時体重の関係

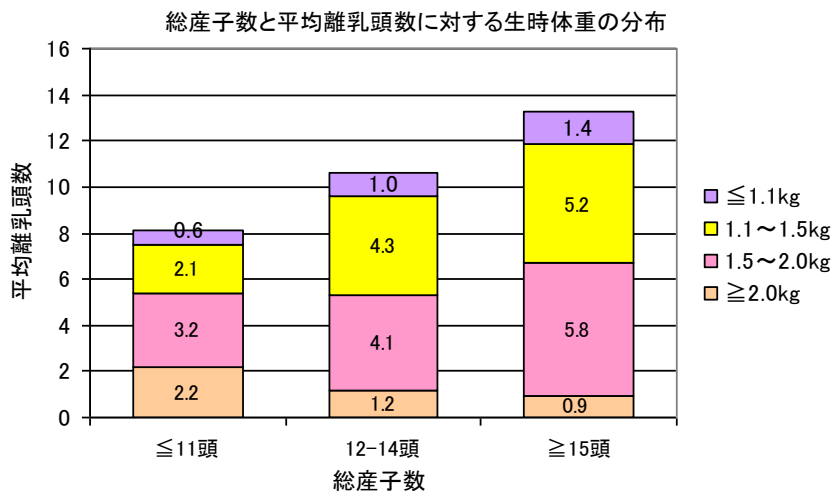
離乳頭数が 30 頭という大目標を掲げることが生産コストを下げる大要因であることが紹介されています。欧米ではすでに先進農場で実績として報告されており、今までよりも 2~4 頭も離乳頭数が増加するわけですから生時体重は平均的に小さくならざるを得ないと考えられます。育てる子宮の容積が



急に大きくなることはないからです。

上の積みグラフは総産子数と生存産子数の関係を示したものです。大まかな構成に違いはなくても、総産子数が 11 頭と 15 頭以上では明らかに違います。2kg 以上の過大仔が減っているのはよしとして、**注目したいのは 1.5~2.0kg のやや大きめ豚や 1.1~1.5kg**

**g** といったやや小ぶりの豚が 2~3 倍近くに増えていることです。それでは離乳まで追いかけた時にその構成に変化が見られるのでしょうか。離乳頭数で調べたものが次のグラフです。前のグラフと比較しながらその差が分娩舎での死亡だとおおよそ確認しながら見てください。

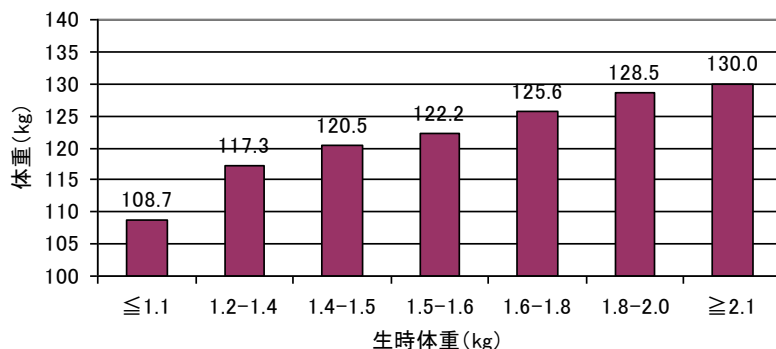


15 頭以上の腹では極小の豚の平均 0.5 頭がお釈迦になっています。実際には中間の黄色とピンクに区分される生時体重の豚が離乳豚の多勢 (約 94%) を占めることになり、これらの豚を今後どのようにして育成するかがポイントになります。

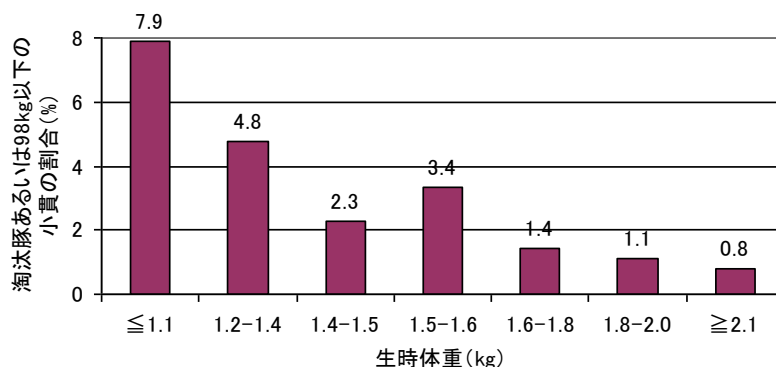
離乳頭数が年間 30 頭といっても数だけ達成すれば良いものではありません。出来るだけ多く出

荷体重までもっていかねばなりません。離乳頭数が 13 頭を越えるとき、目標とすべき生時 1.2~2.0kg の豚達が離乳後 156 日目でここまでバラついて分布してしまうのです (次頁グラフ)。同じ日令で 20kg もの差は現状でも疾病などの発生があればよくあることですので、それだけにこれらに対する対策はより一層必要になることだけは確かでしょう。

生時体重と出荷体重(離乳後156日目)の関係



生時体重と淘汰廃用豚(98kg以下の小貫)になる割合



サーコウィルスのような免疫消耗疾患は、ウスヤガリを頻発する疾病として知られていますが、効果的なワクチンがほぼ定着したのでそれほどウスヤガリは出ていません。しかし、こうしたワクチンの効果でバラツキがどれくらいに落ち着くのかはまだ詳しくわかりません。

同じことですが別の視点から見てみると、98kg以下の小貫出荷にならざるを得なかった豚はやはり1.1kg以下の小さな生時体重の豚に多いことが示されています。

母豚への妊娠末期の増飼いはリスクを伴うことから別の方法を探る必要があります。

**産子豚の体重分布のしくみの理解と比較的小さな豚の育成の方法論は今後もっと勉強や検討が必要だと思います。**

(カンザス州立大学情報より考察、グラフの体重換算はkgにしたため多少の誤差があります)